

第 15 回へき地・地域医療学会 オンデマンド

東日本大震災から 11 年 ～震災を越えて～

東日本大震災から 11 年。未曾有の状況下で地域の医療・住民の健康を守り、地域を支え続けてきた被災者・支援者の 11 年を振り返り、更なる地域の復興と今後起こりうるさまざまな災害時の備えを共に考え・学ぶ。岩手・宮城・福島被災地の医師、自治医大同窓会東日本大震災支援プロジェクト事務局、同プロジェクト以降も支援を続ける医師からの報告と女川における当協会での震災支援をオンデマンド動画でお届けする。

① 東日本大震災から 11 年～震災を越えて～

安部 宏（南相馬市立総合病院産婦人科 科長）

② 大規模災害からのレジリエンス：何を伝え、残せるか

菅野 武（東北大学病院 総合地域医療教育支援部（消化器内科兼務）／

宮城県保健福祉部 参与（医師確保対策担当））

③ 震災時の病院対応の振り返りとその後 ～岩手県立釜石病院の場合～

石黒 保直（岩手県立江刺病院）

④ 自治医科大学医学部同窓会東日本大震災支援プロジェクト

石川 鎮清（自治医科大学情報センター）

⑤ 東日本大震災から 11 年 『気仙沼に関りを続けて』

古屋 聡（山梨市立牧丘病院）

⑥ 鼎談「東日本大震災被災地 女川への地域医療振興協会による支援を振り返って」

齊藤 充（女川町地域医療センター管理者）

山田 隆司（地域医療振興協会 副理事長）

折茂 賢一郎（おりも総合クリニック 院長）

座長 杉田 義博（日光市民病院 管理者）

東日本大震災から 11 年～震災を越えて～

安部 宏

南相馬市立総合病院産婦人科 科長

これまで福島県南相馬市から産婦人科医としての報告として、2012 年 8 月号、2016 年 1 月号、2021 年 11 月号に 3 回寄稿・掲載していただきました。今回は震災当時のことと 11 年が経過した福島県の現在の姿や比較を動画やスライドで伝えたいと思います。岩手県・宮城県との大きな違いである原発事故を中心に取り上げました。

南相馬市立総合病院は福島第一原発からは 23 キロ地点に位置します。地震、津波による病院混乱はほぼ 1 日半で収束しました。震災発生後の原子力発電所の経過と避難についてですが、3 月 11 日 19 時 3 分に原子力緊急事態が宣言され、半径 3 キロに避難指示が発令されました。翌日 12 日に 10 キロに拡大され、15 時 36 分に福島第 1 原発 1 号機が水素爆発を起こし、半径 20 キロに避難指示が拡大されました。3 月 14 日 11 時 1 分に 3 号機が水素爆発し、3 月 15 日 20 から 30 キロ圏内 14 万人を対象に屋内退避指示が出され、市民のほとんどが避難しました。当院の職員も残るものと避難するものに分かれ、残った職員で入院患者を管理しました。我々は外の放射線量を知るすべはなく、屋内にいながらも、目に見えない放射能におびえていました。屋内退避指示が出された 30 キロ圏内は支援物資や医療資源が搬入されず、物資枯渇・孤立状態となる一方でした。この状況の中 30 キロ圏内に足を踏み入れ、物資・資材を搬入してくれたのは自衛隊のみでした。食料や水は底をつき、入院患者も職員もおにぎりとお水のみでしのぎました。3 月 19 日に入院患者に対し、区域内退去命令が下され、自衛隊の援助で 20 日朝に完了しました。

11 年が経過した今現在の帰還困難区域の現状も紹介します。

福島中央テレビが作成・放送した特集

①福島 to2021 あれからとこれから ②伝えたい福島の未来
を使用させていただきました。

最後に私からへき地・地域医療の魅力について、皆さんに伝えたいことをまとめました。

【略歴】

南相馬市小高区出身。県立双葉高校を卒業後、自治医科大学に進学する。

平成 9 年に自治医科大学を卒業し、自治医科大学附属病院で 2 年間の初期研修を行い、平成 11 年より 2 年間僻地診療所に勤務した。

(天栄村国民健康保険診療所に 1 年、南会津市町村圏組合地域医療支援センターに 1 年)

平成 13 年より福島県立医科大学産科婦人科学講座で 3 年間の後期研修を行った後

平成 16 年より福島県立南会津病院産婦人科勤務となり、

平成 20 年より南相馬市立総合病院産婦人科勤務となる。

東日本大震災による避難のため、平成 23 年 4 月から郡山市の太田西ノ内病院に勤務し、

平成 24 年 4 月から南相馬市立総合病院産婦人科に復職し、現在に至る。

大規模災害からのレジリエンス：何を伝え、残せるか

菅野 武

東北大学病院 総合地域医療教育支援部（消化器内科兼務）
宮城県保健福祉部 参与（医師確保対策担当）

2011年3月11日に発生した東日本大震災、私は卒後6年目の医師として勤務していた宮城県南三陸町公立志津川病院で被災した。15mにも及ぶ津波が町を襲い、多くの患者やスタッフをも呑み込んでいった。3日間に渡り、食料も電気も医療資機材も無く死を感じながらも患者と寄り添い支えあい、私自身最後のヘリで救出された。家族との再会を経て再び南三陸町に戻り、私は打ち壊された町の災害時受援活動（受援：支援を受け止めること）に約1か月専心した。そうした急性期対応を受け、私は米 TIME 誌「2011年世界で最も影響力のある100人」に選出された。この受賞は日本人すべての苦難と闘いの象徴であり、私自身の人生の変曲点ともなった。

レジリエンス（Resilience）とは復元力、跳ね返す力、しなやかな強さを指す。それは単に回復し失われたものを取り戻すリカバリー（Recovery）とは異なる。私自身の被災し救出された経験、そして再び南三陸町に戻り、世界中から支援を受け多くの医療支援チームとつながりながら残された命をつないだ経験。さらに、今に向けて積み重ねてきた時間や、次に残すべく進めている研究、また導かれ次の人材育成に関わっていることなども本日皆さんと共有したい。私達が悩みながら進む復興の道のりは、すべての人にとって苦しみを乗り越えるきっかけとなれるかもしれない。それこそ、今を生きる者が次に伝えるべきことではないだろうか。災害とも言われる新型コロナウイルス感染拡大の暗い閉塞感の中、自身と周りの人たちのいのちを守り、大きな困難を乗り越えるために必要なレジリエンスを考えるきっかけになれば幸いである。

【略歴】

2005年（平成17年）3月	自治医科大学医学部卒業
同年 4月	独立行政法人国立病院機構仙台医療センター 臨床研修医
2007年（平成19年）4月	栗原市立栗原中央病院 内科医員
2009年（平成21年）4月	公立志津川病院 内科医長
2011年（平成23年）4月	東北大学大学院 消化器病態学分野（震災のため実際は5月～）
2012年（平成24年）4月	丸森町国民健康保険丸森病院 内科医長
2014年（平成26年）4月	東北大学大学院 消化器病態学分野
2015年（平成27年）3月	同 博士課程卒業
同年 4月	東北大学病院卒後研修センター 助教（消化器内科兼務）
同年 10月	宮城県保健福祉部 参与（兼務）
2017年（平成29年）10月	マクマスター大学消化器内科(Canada), Research fellow
2019年（令和元年）10月	東北大学病院総合地域医療教育支援部 助教（消化器内科兼務） （文部科学省 東北大学・福島県立医大 災害保健医療人材の養成プログラム 事務局）
2020年（令和2年）4月	宮城県保健福祉部 参与（兼務）
同年 8月	東北大学メディカル・メガバンク機構 地域医療支援部門 助教
2021年（令和3年）4月	東北大学病院総合地域医療教育支援部 助教（消化器内科兼務）
※著書 「寄り添い支える～公立志津川病院 若き内科医の3・11」（河北新報出版センター 2011年）	
<受賞歴>・2011年4月	米 TIME 誌 2011年「世界で最も影響力のある100人」選出
・2013年10月	第2回「明日の象徴」医師部門 選出
・2017年10月	日本消化器内視鏡学会 学会賞

震災時の病院対応の振り返りとその後 ～岩手県立釜石病院の場合～

石黒 保直

岩手県立江刺病院

あれから 11 年もたちましたが、東日本大震災から復興したのか、していないのか、立場や職業によっても感覚は異なるところだと思います。また、復興は進んでいるとは言えても、完了したとはいつまでたっても言えないのではないのでしょうか。今回のセッションの副題に「震災を越えて」と添えられていたため、あらためて震災とその後のことを考える機会をいただいたと考え、今回の発表の内容を考えました。事前に、岩手県の自治医大 1 期生で、震災当時、岩手県立釜石病院の院長として辣腕をふるった遠藤秀彦先生が以前よく講演などで話されていた肋骨搬送システムが印象に残っているという話も伺っていましたので、このことも岩手の県立病院の協力関係を示すわかりやすい例としてとりあげました。ただ、そんなに単純な話でもないため、自分なりに注釈はいれるとして、避けては通れないのが、岩手県立釜石病院が震災後に入院と救急外来をどのように維持したか、で、現在 DMAT の講習で必ず習う被災地病院支援の言葉である「籠城」と「病院避難」になぞらえて振り返りました。コロナ禍における急激な医療ニーズの増加とバランスの変化に伴い、多くの医療機関・医療圏で必要であった対応の表現としてのサージ・キャパシティですが、震災当時こんな言葉は知らなくても、岩手県立釜石病院単体としても、県全体の病院群としても、それぞれの病院がすこしずつ～かなりのキャパシティを一時的に増やして対応していました。籠城や病院避難にしてもそうですが、言葉を知らなくても一生懸命正しいことをしようとしていれば、間違ったことはしないし、のちに端的にその行為を表現する言葉がついてくるのかなと思えた振り返りでした。震災時は学生だった人たちが岩手県の職員となって県立病院に勤務していますが、震災のことは知っていても、病院という組織でどのように対応したかは知らなかったりします。イヤイヤ参加した大規模災害訓練を通して、そのような「後輩」たちに伝えられる経験を自分はしている、ということを感じ、若者にうるさかられない程度に歴史を伝えていく義務もあるのかなと襟元をただす思いでした。本来フリートークで雑な話題もまじえながらお話しすることもできますが、今回はオンデマンドということで、よりいっそうコンプライアンスに気をつけて発表させていただこうと思っております。

【略歴】

2000年3月 自治医科大学医学部卒業
 2000年4月 岩手県立中央病院 初期研修
 2002年4月 岩手県立福岡（現 二戸）病院 外科医師
 2004年4月 済生会岩泉病院 外科医師
 2005年4月 自治医科大学消化器一般外科 後期研修
 2007年4月 岩手県立大槌病院 外科長
 2009年4月 岩手県立釜石病院 災害医療科長
 2011年3月11日 東日本大震災
 2012年4月 自治医科大学消化器一般外科 病院助教
 2014年4月 古河赤十字病院 第2外科部長
 2016年4月 岩手県立釜石病院 第2外科長 災害医療科長 医療研修科長
 2019年4月 岩手県立宮古病院 第2外科長 臨床研修科長 感染対策室長
 2022年4月 現職

自治医科大学医学部同窓会東日本大震災支援プロジェクト

石川 鎮清

自治医科大学情報センター

3月11日の東日本大震災の後、同窓会の支援プロジェクトが発足した。震災発生時、卒後指導部長が尾身茂先生（東京1期）で、副部長が私だった。12日には、尾身先生からメールマガジンで卒業生に向けて、支援の協力を求めるメールが発信された。13日に白石吉彦先生（徳島15期）、14日に古屋 聡先生（山梨10期）来学し、知り合いの吉岡氏よりお借りしたプリウスに乗って先遣隊として被災地に向かった。まず、佐藤元美先生（岩手2期）が院長をしている藤沢町民病院を拠点として活動を開始した。

支援地域を遠藤秀彦先生（岩手1期）が院長をしている県立釜石病院、西澤匡先生（宮城20期）、菅野武先生（宮城28期）の南三陸とその後方である登米市を支援対象とし、6か月の支援が開始した。移動には、第1,2陣では地域医療振興協会のヘリコプターで移送していただき、その後、車、新幹線と交通事情に合わせて移動した。第7陣までは6~7人、第8陣からは3~4人、第26陣からは2人とニーズに合わせて徐々に人数を減らしていき、9月30日（第28陣）で終了した。

支援に際しては、1) 継続性、2) 自立型、3) 地域という視点、の3つの原則を共有した。また、現地では地域のリーダーの指示を仰ぎつつ行動をとることとした。各陣1人コーディネータとして、現地医療統括の支援をすることとともにチームの活動をコーディネートした。第8陣から第27陣まで臨床心理士チームと同行した。臨床心理士チームは南三陸ではカフェを運営し、地道に寄り添うような活動を行い次第に被災した住民も心を開くようになっていった。

自治医大は開学以来50年が経過している。その間、都道府県人会という経系と同級生という横系で全国、世代を超えたネットワークがあり、また、地域医療を担ってきたという共通の基盤があるため初めて会ったとしてもすぐに旧知の仲のように振る舞うことができた。震災、豪雨、新型コロナウイルスなどさまざま困難があるが、どんなときでも自治医大の卒業生は力を合わせて立ち向かっていくことができる集団であると信じている。

【略歴】

1989年3月	自治医科大学卒業（福岡12期）
1989年6月~1998年5月	福岡県内で勤務（九州厚生年金病院、赤池町立病院、新宮町相島診療所、大島村診療所など9年間）
1998年6月~2003年3月	自治医科大学地域医療学助手
2003年4月~2008年3月	自治医科大学地域医療学講師
2008年4月~2013年3月	自治医科大学地域医療学准教授
2013年4月~2021年3月	自治医科大学医学教育センター教授
2021年4月~	自治医科大学情報センター教授
2006年11月より3ヶ月間	ハワイに短期留学

東日本大震災から 11 年
『気仙沼に関りを続けて』

古屋 聡

山梨市立牧丘病院

演者は「自治医大同窓会チーム」の先遣隊として、隠岐の白石吉彦先生とともに 2011 年 3 月 15 日の夕に自治医大を出発、ほぼ一週間の活動で同チーム「東日本大震災支援プロジェクト」初動立ち上げ部分の現地部隊としての役割を担った。4 月から 9 月は、宮城県気仙沼市に成立した在宅医療・ケア支援に特化した医療支援チーム「気仙沼巡回療養支援隊」に参加、並行して、独自の口腔ケア支援から、巡回療養支援隊の特殊活動といえる「気仙沼口腔ケア・摂食嚥下・コミュニケーションサポート」活動をコーディネート、この活動は数年以上続いて現地の多職種連携を推進させる結果となり、2013 年から「気仙沼・南三陸『食べる』取り組み研究会」という多職種勉強会に発展、現在に至っている。2011 年 10 月からコロナ禍が日本を席卷しようとする 2000 年 2 月まで気仙沼市立本吉病院の非常勤医師として定期的に気仙沼に赴き診療を行いながら、2012 年から仮設住宅、2015 年から災害公営住宅にも健康相談などで訪問するようになり、2018 年からは名古屋などで活躍する管理栄養士奥村圭子さんのリードのもと現地の管理栄養士や他の職種の方々と共に「気仙沼栄養パトロール」活動を開始、コロナ禍で活動様式をオンラインなどを用いた形に変更しながらも現在も継続している。災害の急性期のダメージから中長期の経過を経て、現地の特に高齢者には孤立、「フレイル・サルコペニア」そして低栄養（または過栄養）の危機が進み、それはコロナ禍でさらに増幅され、生命的問題にもなっている。これはすでに日本全国に共通した課題である。災害そして災害後の各時期の対応、そして近年の新型コロナウイルス感染症への対応は、地域包括ケアにおける弱者への関わりそのものである。私たちのふだんの「地域医療に関わる取り組み」がすなわち災害対応に向けての実力の涵養につながった経験をもとに考えても、コロナ対応＝防災＝地域包括ケアである。この被災地の 11 年間に学びつつ、私たちのこれからの姿勢と取り組みについて考えてみたい。

【略歴】

1962 年 山梨県生まれ
1987 年 自治医科大学卒 山梨県立中央病院初期研修を経て
1989 年 牧丘町立（当時）牧丘病院 整形外科
1992 年 塩山市立（当時）塩山診療所
2006 年 山梨市立牧丘病院 整形外科
2008 年 同院長
2017 年 同院長退任
現在、外来・入院・在宅診療を行っている。
在宅患者は約 120 ケース、月間訪問件数は 200-220 件
傾倒する活動：
プライマリケア整形外科（整形内科）・プライマリケアエコー
口腔ケア・摂食嚥下・コミュニケーション
災害支援
地域包括ケア